

## カワグチツボ *Fluviocingula elegantula* (A. Adams)

### 【選定理由】

本種は、内湾奥の河口域に発達したヨシ原湿地周辺や、それより下部の泥干潟の表面に生息する。県内ではヨシ原湿地や泥干潟という生息環境自体が護岸工事や埋め立てで著しく減少しているため、本種の生息地、個体数とも著しく減少したと考えられる（木村・木村, 1999）。将来的に絶滅危惧に移行する危険性がある種と評価された。

### 【形態】

殻は殻長約 5 mm と小形で、長卵形。臍孔は狭いが開く、蓋は革質で薄い。近似種のワカウラツボ *Wakauraia sakaguchii* (Kuroda & Habe) とは臍孔が開く点、殻が薄い点などで区別される。



豊橋市汐川干潟, 2001年8月5日, 木村昭一採集

### 【分布の概要】

#### 【県内の分布】

上述したように生息場所は著しく減少したと考えられ、木村・木村（1999）を含めて現在約 10 か所である。生息場所では群生し、個体数は多い場合が多い。

#### 【世界及び国内の分布】

日本、朝鮮半島、中国大陸、ロシア沿海州、日本では北海道北部～九州に分布する（福田, 2012）。

### 【生息地の環境／生態的特性】

県内では上述したようなヨシ原湿地周辺やそれより下部の泥干潟の表面に生息している。

### 【現在の生息状況／減少の要因】

上述したようなヨシ原湿地や内湾奥の泥干潟が護岸工事などで破壊され、生息地が減少している。

### 【保全上の留意点】

上述したようなヨシ原湿地や泥干潟を保全することはいうまでもなく、周辺水域の水質も保全する必要がある。

### 【特記事項】

庄内川河口域ではワカウラツボと本種の共に健全な個体群が認められているが、生息環境は前者が潮間帯上～中部の埋もれ石の下面、後者はやや下部の泥干潟の表面にエドガワゴマツボ *Stenothyra edogawensis* (Yokoyama) と同所的に生息している（木村, 2000）。

### 【引用文献】

福田 宏, 2012. カワグチツボ, p. 38. in : 日本ベントス学会 (編) 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, 385pp. 東海大学出版会, 秦野.

木村昭一・木村妙子, 1999. 三河湾及び伊勢湾河口域におけるアシ原湿地の腹足類相. 日本ベントス学会誌 54: 44-56.

木村昭一, 2000. 藤前干潟で採集されたワカウラツボ. かきつばた, (27): 14-16.

(木村昭一)